

## 『太平広記』を読む

——虎に食べられそうになる話——

二〇〇八年冬学期の学部演習では、『太平広記』の化虎譚を読んだ。人間が虎に変身する話の中では、中島敦「山月記」の原作である「李徴」（『太平広記』巻四二七出『宣室志』）のように、虎と化した人間を主人公に、その苦悩や心理の変化を描いたものがよく知られている。しかし一方ではその逆に、虎に食われそうになる人間を主人公とした物語がある。虎といっても、もともとは人間が化したものなので、食われる側の人間との間に様々なやり取りが生じ、概ねユーモラスな味わいものになっている。ここではこのタイプの話三篇を、『太平広記』の記す出展の成立順に従い訳出した。

底本は、談愷本を元に他本により校訂を加えた汪紹楹校本（中華書局、一九六一年改訂版の二〇〇六年印本によった）を用いたが、この本にはつとに校訂上の不備が指摘されている。次の諸本で校勘を行った。

許自昌本（東京大学漢籍コーナー蔵本）、文淵閣四庫全書本、黄晟巾箱本（東京大学漢籍コーナー所蔵の重刊本（封面に嘉慶元年重鐫、賦梅堂藏板とある））、上海進歩書局石印本（広陵古籍刻印社影印本、一九九五年）、清孫潜校宋本（敵一萍『太平広記校勘記』、芸文印書館影印『太平広記』附録、一九七〇年）。

なお張国風（『太平広記』版本考述）（中華書局、二〇〇四年）は、汪紹楹校本が、清陳鱣校宋本などとの校勘が不十分であることを指摘し、陳校本との主要な異文を挙げている。校勘にあたってはこれを参照した。

底本は句読点を全て「。」とするが、適宜「、」と「。」に分け、カギカッコを付した。

授業に参加したのは、博士課程：上原究一、鈴木弥生、修士課程：林卓穎、明田川聡士、加藤健太郎、学部生：鈴木政光、武井遙香、杉山裕梨、杉浦恵、石塚政行（言語学科）の諸君である（所属は二〇〇八年度のもの）。次の三編を読解する際には、ほとんど全員がレポーターとして参加しているが、四名が代表してその成果をまとめた。（戸倉英美記）

## 『太平広記』卷四二七「稽胡」

担当：上原究一

### 【原文】

慈州稽胡者以弋獵爲業。唐開元末、逐鹿深山。鹿急走投一室。室中有道士、朱衣凭案而坐。見胡驚愕（1）、問其來由。胡具言姓名（2）、云、「適逐一鹿、不覺深入。辭謝衝突。」道士謂胡曰、「我是虎王。天帝令（3）我主施諸虎之食。一切獸各有對、無枉也。適聞汝稱姓名、合爲吾食。」案頭有朱筆及盃兼簿籍。因開簿以示胡。胡戰懼良久、固求釋放。道士云、「吾（4）不惜放汝、天命如此。爲之奈何。」若放汝、便失我一食、汝既相遇、必爲取免（5）。「久之乃云、「明日可作草人（6）、以己衣服之（7）。及猪血三斗（8）、絹一匹、持與俱來。或當得免。」胡遲回未去、見群虎來朝。道士處分所食、遂各散去。胡尋再拜而還。翌日、乃持物以詣。道士笑曰、「爾能有信、故爲佳士（9）。」因令胡立草人庭中（10）、置猪血於其側。然後令胡上樹、以下望之高十餘丈、云、止此得矣。可以絹縛身著樹。不爾、恐有損落。」尋還房中、變作一虎。出庭仰視胡、大嗥吼數四、向樹跳躍。知胡不可得、乃攫草人、擲高數丈、往食猪血盡。入房復爲道士、

謂胡曰、「可速下來。」胡下再拜。便以朱筆勾胡名。<sup>(六)</sup>於是免難。出廣異記<sup>(七)</sup>

## 【校勘】

- (1) 驚愕 許自昌本は「愕驚」に作る。
- (2) 胡具言姓名 許自昌本、文淵閣四庫全書本、黄晟中箱本、上海進歩書局石印本はいずれも「胡遂具言姓名」に作る。
- (3) 我是虎王。天帝令 孫潜校本を利用した嚴一萍『太平広記校勘記』（芸文印書館影印『大平広記』附録、一九七〇年）によると、「我是虎王也。天帝有命令」とする校訂が入っているという。孫潜の朱校が入った談愷本は完本ではなく、一部の巻は誰が何をもとに行ったのかは不明な朱校の施された紙質の異なる別の談愷本で補われており、その補われた箇所の一つが巻四二四から巻四三六だという。つまり『校勘記』の引く形に作る本が何であったのかは現在のところ確認不能のだが、孫潜が基づいたものと同じではないらしい。この問題については、嚴一萍前掲書解説、佐野誠子「台湾大学藏孫潜校本『太平広記』について」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第4号、二〇〇二）などを参照。張国風『太平広記』版本考述』に附された「孫校本異文選粹」はこの箇所を挙げていない。
- (4) 吾 許自昌本は「我」に作る。
- (5) 必爲取免 孫校本は「百方取免」に作るという。
- (6) 草人 孫校本は「草木人」に作るという。
- (7) 以己衣服之 許自昌本は「之」字を欠く。
- (8) 猪血三斗 文淵閣四庫全書本は「猪血三升」に作る。

(9) 故爲佳士 許自昌本は「故爲佳士」に作るが、字形による誤りであろう。

(10) 因令胡立草人庭中 「立」は談本に見えず、中華書局本は「明鈔本（野竹齋鈔本を指す）」により補ったとする。李時人編校・何満子審定『全唐五代小説』（陝西人民出版社、一九九八）も野竹齋鈔本により「立」を補っている。また、巖一萍『校勘記』が引く孫校本、及び上海進歩書局石印本にも「立」はある。文淵閣四庫全書本と黄晟本は共に「因令置草人庭中」としており、これも一つの解決策だが、いずれも清代のものである。明鈔本によるこちらに従っておく。なお、許自昌本は「因令胡草人庭中」に作るが、「入」は明らかに字形の類似により「人」を誤ったもの。

### 【書きたつ】

慈州の稽胡は弋獵を以て業と爲す。唐の開元の末、鹿を深山に逐ふ。鹿急ぎ走りて一室に投ず。室中道士有り、朱衣にして案に凭りて坐す。胡を見て驚愕し、其の來由を問ふ。胡具に姓名を言ひて云ふ、「適、一鹿を逐ひて、覺えずして深入す。衝突せるを辭謝す」と。道士胡に謂ひて曰く、「我は是れ虎の王。天帝我をして諸虎の食を施すを主らしむ。一切獸は各、對有りて、枉げること無きなり。適、汝の姓名を稱ふるを聞くに、合に吾に食らはるべし」と。案頭に朱筆及び盃兼ねて簿籍有り。因りて簿を開きて以て胡に示す。胡戰懼すること良久しくして、固く釋放を求む。道士云ふ、「吾汝を放つを惜しまざるも、天命此の如し。之を奈何爲ん。若し汝を放たば、便ち我が一食を失ふも、汝既に相遇はば、必ず爲に免るるを取らん」と。之を久しくして乃ち云ふ、「明日草人を作り、己が衣を以て之を服すべし。及び猪血三斗、絹一匹、與に俱に持ち來たれ。或いは當に免るるを得べし」と。胡遅回して未だ去らざるに、群虎の來朝するを見る。道士食らふ所を處分し、遂に各、散去す。胡尋いで再拜して還る。翌日、乃ち物を持ちて以て詣る。道士笑ひて曰く、「爾能く信有り、故に佳士と爲さん」と。因りて胡をして草人を庭中に立て、猪血を其の側に

置かしむ。然る後に胡をして樹に上らしめ、下望することの高さ十餘丈なるを以てし、云ふ、「此に止まれば得。絹を以て身を縛りて樹に着くべし。爾しからずんば、恐らくは損ひて落つること有らん」と。尋いで房中に還り、變じて一虎と作る。庭に出でて胡を仰視し、大いに嗥吼すること數四、樹に向かひて跳躍す。胡の得べからざるを知るや、乃ち草人を攫ひ、擲はねること高さ數丈、往きて猪血を食らひ盡くす。房に入りて復た道士と爲り、胡に謂ひて曰く、「速やかに下り來るべし」と。胡下りて再拜す。便ち朱筆を以て胡の名を勾す。是に於いて難を免る。廣異記に出づ。

## 【現代語訳】

慈州の稽胡という者は、いぐるみで狩りをすることを生業としていた。唐の開元年間（七一三〜七四一）の末、山奥に鹿を追っていた。鹿は急いで逃げ、とある家屋に飛び込んだ。家の中には道士がおり、朱色の衣をまとい、つくえにもたれて座っていた。胡を見ると大いに驚き、ことのいきさつを尋ねた。胡は詳しく姓名を告げて言った。「たまたま一匹の鹿を追いかけているうち、いつの間にやら山奥まで来てしまいました。お騒がせしたことはお詫びいたします。」道士は胡に言った。「わしは虎の王なるぞ。天帝はわしに虎たちに食事を与えることを取り仕切らせておる。そもそも獣というものはみな獲物とする相手が決まっています、それを曲げることはないものなのじゃ。たまたまお主が姓名を名乗るのを聞いたが、わしに食われる定めとなっておる。」つくえの上には朱筆と盃、更に簿籍があった。そこで簿籍を開いて胡に見せた。胡はしばらくの間恐れおののいていたが、それから助けてくれるよう強く頼んだ。道士は言った。「わしはお主を助けてやるのにやぶさかではないのだが、天命がこうなっておるからう。この状況を一体どうしたらよいものか。もしお主を助けてやれば、それはわしの一食を失うことになるわけだが、お主と既に顔を合わせてしまったからには、どうにかお主のために助かる術を考えてやるとしよう。」しばらくして道士はやつと言った。「明日、草人形を作り、自分の衣を着せるがよい。それから、ブタの血を三斗と絹を一匹、草人形と一緒に持って来るのだ。もしか

すると助かることが出来るかもしれん。」胡がぐずぐずして帰らずにいると、多くの虎が来朝するのを見た。道士が虎たちにそれぞれの食べるものを申し渡しやると、虎たちは散り散りに帰って行った。胡はそこで再拝して帰った。翌日、(言われた通りの)物を持って道士のところへやって来た。道士は笑っていった。「お主は誠実なやつじゃ、それゆえ立派な人物とみなそう。」そこで胡に草人形を庭に立てさせ、その隣にブタの血を置かせた。それから胡を木に登らせ、胡が下を見下ろすこと十数丈の高さに至ると言った。「そこにとどまっておれば上手く行く。絹で体を木に縛り付けるのじゃ。さもないとびっくりして落っこちてしまうかもしれんからのう。」そして部屋に戻り、化けて一匹の虎となった。庭に出ると胡を仰ぎ見て、何度も大声で吼えたり、木に向かつて飛びかかった。胡に届かないと悟ると、今度は草人形をかっさらい、数丈の高さまでおどりあがって、ブタの血のところへ行って食べ尽くした。部屋に入って道士に戻り、胡に告げて言った。「早く降りて参れ。」胡は降りてきて再拝した。(道士は)すぐさま朱筆で(簿籍の)胡の名前に食べ終えた印を付けた。(胡は)こうして難を免れた。 出典は『広異記』

## 注

(一) 爲之奈何「之」が指す対象は「天命如此」と考え、「天命はすでに決っているが、どうすればよいか」と解釈した。

(二) 失我一食 『太平広記』巻四二六に収められる類話「峡口道士」(出典は『解頤録』)では、虎となる道士は上帝に罪を得たために一千人の人を食べることを定められている(原文「吾有罪于上帝、被譴在此爲虎。合食一千人」)。「峡口道士」と「稽胡」には多くの類似点があり、人食い虎とはこのようなものである、という当時の小説における一般的な概念、ないし約束事の類を反映していると考えられる。そうであれば、ここでの「失我一食」というのも、単に一度の食事を逃すという程度の意味ではなく、道士の運命を左右するような重みのあることなのかもしれない。

(三) 然後令胡上樹、以下望之高十餘丈。云、……「然る後に胡をして樹に上らしめ、下を以て之を望み、高さ十餘丈にして云ふ、……」と訓読して「それから胡を木に登らせ、下から彼を見上げて、十数丈の高さに達すると言った」と訳すことも出来

そうだ。こう解釈すると、少し前の「道士笑曰」以降は最後の「胡下再拜」と「於是免難」を除けば全ての動詞の動作主が道士となつて、虎に変じた前後の道士の行動を描く一連の自然な流れの文章として読める。一方、道士が虎に変わってから胡の視点からその様子を描写するような形になっているから、「下望」はここで胡の視点を示すための表現と見て本文のように解釈するのも有力である。今は底本の句読に従っておく。なお、上海進歩書局石印本は「然後令胡上樹。以下望之。高十餘丈。云……」と点を切るので、本注で示したような解釈をしていたものと思われる。また、前掲『全唐五代小説』も「然後令胡上樹以下望之、高十餘丈、云……」と句読を切っている。対して、本文と同じ句読を採るものには王汝濤『全唐小説』（山東文芸出版社、一九九三）がある。

〔四〕 擲高數丈「擲つこと高さ數丈」と訓じて「草人形を數丈の高さまで投げ上げた」と訳すことも出来そうだが、続いて訳注を掲げる『太平広記』巻四三三所収の類話「柳井」（出典は『原化記』）では、虎と化した胡僧が食べるべき人間の代わりとしてその衣服を食べる場面で跳躍しているので（原文「虎得衣跳躍、擊擦而吞之」）、ここも同様の描写であると解釈した。

〔五〕 往食豬血盡 訳文に掲げたような意味であるうが、訓読には確たる根拠なし。「動詞十目的語十結果補語」という構文だろうか？ 口語的な表現である可能性が高い。

〔六〕 以朱筆勾胡名 名簿を「勾」するという動詞は、動作としては「レ点を付ける」場合と「上から線を引く」場合とが、意味するところも「リストに目印を付ける」場合と「リストから削除する」場合とがあるが、ここでは胡を食べるべきリストから削除した（初めからリストに載っていないかつたことにした）というわけではなく、草人形を身代わりすることによつて名目上食べたことにしたわけであるから、「印を付ける」の意味である。しかし、朱筆で上から線を引いても墨で書かれた胡の名は見えなくてはならないから、それでも食べた印として機能し得る。そのため、動作としてはレ点を付すのではなく上から直線を引いた可能性も残るので、このように訳しておいた。

〔七〕 中唐初期の文言小説集。至徳二年の進士、戴孚の撰。二十巻からなつたという原書は北宋までに散逸し、抄本の形で現存する六巻本數種及び二十巻本などはいずれも明代以降に『太平広記』などの諸本から三〇〇条あまりを集めたもの。詳しくは杜德橋「広異記初探」（『新華學報』十五号、一九八五）、溝部良恵「北京図書館所蔵『広異記』抄本について」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第1号、一九九八）などを参照。

## 『太平広記』卷四三三「柳并」

担当：鈴木弥生

## 【原文】

河東柳并爲監察御史。入嶺推覆、將一書吏隨行、常所委任。至嶺下宿孤館中、從吏皆在廳內席地而寢。時半夜、月初上。衆皆臥、并獨覺。忽見一小鬼長尺餘、狀若獼猴、手持一紙幡子步上階、以幡插書吏頭邊而去。并乃潛起、拔去之、復臥伺焉。少頃、一虎入來遍嗅諸人而去。須臾、小鬼又來、別以幡子插之。復又拔去之。少頃、虎又來遍嗅而去。如此者三度、而天向明、乃至旦。召吏言其事、「旦日汝當難免。自須爲計。不可隨我。」并有劍、取與之、乃令逃難。此吏素強勇、携劍入山、尋逐虎穴。行二十里至一茅菴。入其中、不見有人、惟見席上案硯朱筆。有一卷文書皆是人名。或有勾者、有未勾者。己名在焉(1)。屋上見一領虎皮。吏懷其書、并取皮、杖劍而去(2)。行未數里、見一胡僧從後來趁。呼之曰、「且住。君不如告某爲計。即可免矣(3)。」吏即止、與之言。見其人狀異、不敢殺之。僧曰、「吾非彊害君者(4)。是天配合食之。豈不見適來文簿。昨日已愆數期。今彊脫、終恐無益。不如以小術厭之(5)。」吏問其術。僧令登一樹以帶自縛、用劍自刺少血塗一單衣投之。「我以衣爲禳之耳。」吏如言登樹、投皮與僧衣之、便作虎狀、哮吼怒目、光如電掣。吏懼、將欲墮者數過。即取單衣、刺血塗之、投於地。虎得衣跳躍、攀摺而吞之(6)。良久、復爲人形、曰、「子免矣。」乃遣去。竟無患焉。出原化記(十一)

## 【校勘】

- (1) 己名在焉 黄晟本・許自昌本とも「焉」を「寫」につくる。
- (2) 杖劍而去 黄晟本・上海進歩書局石印本とも「杖」を「仗」につくる。
- (3) 即可免矣 許自昌本は「郎」を「郎」につくる。
- (4) 吾非彊害君者 許自昌本は「彊」を「強」につくる。
- (5) 不如以小術厭之 許自昌本は「如」を「知」につくる。
- (6) 擘捺而吞之 黄晟本は「捺」の手偏を土偏につくる。

## 【書き下し】

河東の柳井は監察御史たり。嶺に入りて推覆するに、一書吏を將ひきいて隨行せしめ、常に委任する所とす。嶺下に至りて孤館中に宿り、從吏皆な廳内に在りて地に席して寝ぬ。時半夜にして月初めて上る。衆皆な臥すも、并獨り覺めたり。忽ち見る一小鬼の長さ尺餘にして、狀かたち獼猴びこうの若きが、手に一紙幡子しはんしを持ち、歩みて階きざしを上り、幡を以て書吏の頭邊に挿して去るを。井乃ち潜かに起ち、之を抜き去り、復た臥して焉を伺ふ。少頃、一虎入り來たりて遍く諸人を嗅ぎて去る。須臾しゆゆにして、小鬼又た來たりて、別に幡子を以て之に挿す。復た又た之を抜き去る。少頃にして、虎又た來たりて遍く嗅ぎて去る。此かくの如ごとき者三度、而して天明るきに向かい、乃ち旦に至る。吏を召して其の事を言ふ、「旦日汝當に免れ難かるべし。自ら須く計を爲すべし。我に隨ふ可からず」と。并に劍有り、取りて之に與へ、乃ち難むさひを逃がれしむ。此の吏素より強勇なれば、劍を携へて山に入り、虎穴を尋ね逐ふ。行くこと二十里、一茅菴に至る。其の中に入るに、人有るを見ず、惟だ席上に案硯朱筆を見るのみ。一卷の文書有りて皆な是れ人名なり。或いは勾する者もの有り、未だ勾せざる者もの有り。己が名も焉に在り。屋上に一領の虎皮を見る。吏其の書を懷にし、并せて皮を取

り、劍を杖とりて去る。行くこと未だ數里ならずして、一胡僧の後ろより來たり趁おふを見る。之を呼びて曰く、「且しばく住とど

まれ。君 それがし 某に告げて計を爲すに如かず。即ち免るる可し」と。吏即ち止まりて、之と言ふ。其の人の状の異なるを見、敢えて之を殺さず。僧曰く、「吾 おれ 疆ひて君を害そこなふ者に非ず、是れ天配して合まさに之を食らはしむべし。豈に適來の文簿を見ざらんや。昨日已に數期を愆たがふ。今疆ひて脱すれば、終り恐らくは益無し。小術を以て之を厭きらふに如かず」と。吏其の術を問ふ。僧一樹に登りて帶を以て自縛し、劔を用ゐて自刺し、少血一單衣に塗り之を投ぜしむ。「我衣を以て之を襪はちふを爲すのみ」と。吏言の如く樹に登り、皮を投じて僧に與へ之を衣きせしむるに、便ち虎状を作し、哮吼して目を怒らせ、光電掣でんせいの如し。吏懼れ、將に墮ちんと欲する者數過たり。即ち單衣を取り、刺血して之に塗り、地に投ず。虎衣を得て跳躍し、擘はくしや捨して之を呑む。良久やしくして、復た人形と爲りて、曰く、「子免れたり」と。乃ち去ら遣しむ。竟に患あひ無し。原化記に出づ。

### 【現代語訳】

河東の柳井は監察御史である。五嶺に入つて何度も実地調査を行ったが、その時はいつも一人の書記官に伴をさせ、仕事を任せていた。山のふもとにたどり着いて、ぼつんと建っている宿に泊まり、下役たちはみな広間で床に敷物を敷いて寝た。真夜中になつて、月がようやく昇つてきた。人々はみんな眠っていたが、柳井だけは目を覚ましていた。不意に、背丈が一尺あまり、その姿は彌猴のような小さな化け物が、手に一本の紙でできた旗を持ち、歩いて階段を上つてくると、その旗を書記官の枕もとに挿して行くのが目に入った。柳井はそこでこっそり起き上がり、旗を抜き去り、また寢床に横になつて様子を見ていた。しばらくして、一頭の虎が入つてきて、人々をのこるくまなく嗅ぎ回り、行つてしまった。まもなく小さな化け物がまたやつて来て、あらためて旗を書記官に挿した。柳井は、今度もまたそれを抜き去つた。しばらくして、虎がまたやつて来て、嗅ぎ回つてから行つてしまった。そういうことが三度あり、ようやく空が明るくなつて、朝が来た。柳井は書記官を召出し、夜の間のことを話した。「明日、おぬしは、虎に食われるとい

う運命から逃れるのは難しいだろう。自分で策を考えねばならない。わたしについて来てはならぬ。」柳井は劍を持っていたが、それを取り出し、彼に与え、そうして災難から逃れさせようとした。この書記官はもともと勇敢だったので、劍を持って山に入り、虎の住む穴を探し求めた。二十里行ったところで、一軒の茅葺きの庵に着いた。中に入ると、人の姿はなく、ただ敷物の上に机、硯、朱筆があるのみである。中に一冊の書きものがあり、書かれているのは、すべて人の名前である。レ印がついている名前もあれば、まだついていないものもある。自分の名前もそこにあった。屋根の上に一枚の虎の皮があるのが見えた。書記官は書きものを懐に入れ、皮をも奪って、劍を手にして立ち去った。まだ数里も行かないうちに、一人の異人の僧が後から追いかけてくるのが見えた。僧は呼びかけてこう言った。「ちょっと待ちなさい。あなたはわしにことの次第を告げて策を考えた方がよい。そうすれば逃れることができるだろう。」そこで書記官は足を止め、その僧と話をした。その人の姿が普通と違うのを見て、どうにも殺すことができなかつた。僧は言った。「わしは強いてあなたを傷つけようというのではない。これは天命であつて、あなたを食らわねばならぬのだ。先ほどの書きものを見たであろう。昨日、もう何回か機会を逃している。今、無理やりに逃げだそうとしても、結局むだになってしまうだろう。それより、小さな術を使って防ぐにこしたことはない。」書記官はその術が何なのかを尋ねた。僧は、書記官に、一本の木に登って帯で自分を縛りつけ、劍で自分の身体を刺し、少量の血を衣服に塗ってそれを自分に投げるようにと指示した。「わしはその衣で災難を払い去るのだ。」(と言つた。)書記官は僧の言葉どおり木に登り、皮を僧に投げ与えると、僧はそれをまもつてたちまち虎の姿になり、咆哮して目を怒らせ、眼光は稲妻のようだった。書記官は怖しさのあまり、あやうく何度も地面に落ちそうになった。書記官は、そこで服を取り出し、自分を刺して流れた血をそれに塗り、地面に投げた。虎は着物にかぶりついて跳躍し、引き裂いてそれを呑みこんだ。しばらくしてまた人の姿に戻り、「あなたは逃れることができた。」と言ひ、書記官を帰した。こうしてついに災いはなくなつたのだつた。出典は『原化記』である。

## 注

- (一) 嶺 ここでは、特に南方の五嶺（大庾嶺・越城嶺・騎田嶺・萌渚嶺・都龐嶺とされる）を指す。
- (二) 推覆 くりかえし吟味して調べる。実地調査をする。
- (三) 獼猴 サル科の哺乳類。猿。
- (四) 旦日汝當難免 「旦日」は「明日」の意味だが、これはその日、すなわち「今日」を意味するはずである。本来昨日起こるはずだった災難を、昨日にとつての翌日、すなわち今日こそは免れえない、という意か。
- (五) 屋上見一領虎皮 虎の皮が屋根の上にあつたのなら、まず外観から認識できそうなものであり、文章の流れから見ても、ここは部屋の中であるという方が適當である。字の誤りか。黄晟本・談愷本・許自昌本・上海進歩書局石印本、また『虎齋』（明・陳繼儒撰。『寶顏堂秘笈 長松茹退／虎齋』上海文明書局、一九二二年）とも、すべて同様である。
- (六) 是天配合食之 「天命などのために、虎が特定のある人間を食らわなければならない」とは、虎が人間を食らう話の常套文句である。他に、卷四二六「峡口道士」（『解頤録』）の「吾合食汝」、卷四二七「稽胡」（『広異記』）の「合爲吾食」、卷四二九「張逢」（『続玄怪録』）の「當得福州鄭錄事」など。
- (七) 愆 あやまつ。たがう。
- (八) 僧令登一樹……一單衣投之 普通、「令」は「くさせた」を意味し、「くするように指示した」とはならない。つまり、「令」以下で表された動作は、そのまま命じられた人物の動作に直結するはずである。だが、ここでは僧が「令」した後、書記官があらためてその動作を行っているので、ここでの「令」は「くするように指示した」とせねばならない。黄晟本・談愷本・許自昌本・上海進歩書局石印本も同じ。なお、『虎齋』では、「僧日登一樹以帶自縛……」と、「登以帶自縛」から「我以衣爲禪之耳」までが胡僧の直接話法となるかたちになっている。「我以衣爲禪之耳」の前には「日」等の語句がないことから、こちらの方が適當であると思われる。
- (九) 禪 わざわいを避けること。本来は、わざわいを避けるための祭祀の意。
- (十) 擘擗 「擘」、「擗」とも「裂く」の意。
- (十一) 原化記 唐代の文言小説集。南宋紹興年間編『秘書省統編到四庫闕書目』に「皇甫氏撰。三卷」と記される。原書は失われ、『太平広記』に逸文六十余篇が収められている。作者皇甫氏については未詳。逸文の記事の内、最も新しいものは開成年間

(八三六―八四〇) のことなので、武宗期(八四二―八四六)頃の人と推定されている。

## 『太平広記』卷四二六「峡口道士」前半「開元中、峡口多虎、執斧、 衣皮而立。」

担当：武井 遥 香

### 【原文】

開元中、峡口多虎、往來舟船皆被傷害。自後但是有船將下峽之時、即預一人(1)充餉虎、方舉船無患。不然、則船中被害(2)者衆矣。自此成例。船留二人(3)上岸餉虎。經數日(4)、其後有一船、内皆豪強。數内有二人(5)單窮(6)、被衆推出、令上岸餉虎。其人自度力不能拒、乃爲出船、而謂諸人曰、「某貧窮、合爲諸公代死。然人各有分定(7)。苟不便(8)爲其所害、某别有懇誠(9)。諸公能允許否(10)。」衆人聞其語言甚切、爲之愴然。而問曰、「爾有何事。」其人曰、「某今便上岸、尋其虎蹤。當自別有計較。但懇爲某留船灘下。至日午時、若不來、即任船去也。」衆人曰、「我等如今便泊船灘下、不止住今日午時、兼爲爾留宿、俟明日若不來、船即去也。」一言訖、船乃下灘。其人乃執一長柯斧、便上岸。入山尋虎、並不見有人蹤、但見虎跡而已。林木深邃、其人乃見一路。虎蹤甚稠、乃更尋之、至一山隘。泥極甚、虎蹤轉多。更行半里、即見一大石室。又有一石床(11)。見一道士在石床上(12)而熟寐。架上有一張虎皮。其人意是變虎之所。乃躡足(四)、于架上取皮。執斧、衣皮而立。

## 【校勘】

- (1) 卽預一人 孫潛校本では「預」を「預備」に作るという。
- (2) 被害 文淵閣四庫全書本は「害」を「患」に作る。
- (3) 二人 文淵閣四庫全書本は「二」を「一」に作る。孫潛校本も「一」に作るという。
- (4) 數日 孫潛校本では「日」を「年」に作るという。
- (5) 二人 文淵閣四庫全書本は「二」を「一」に作る。
- (6) 單窮 文淵閣四庫全書本は「窮」を「寒」に作る。
- (7) 分定 許自昌本・文淵閣四庫全書本は「分定」を「定分」に作る。
- (8) 苟不便 文淵閣四庫全書本は「不便」を「使不」に作る。
- (9) 某别有懇誠 孫潛校本では「誠」字を欠くという。
- (10) 諸公能允許否 黄晟本・上海進歩書局石印本は「請諸公能允許否」に作る。
- (11) 石床 黄晟本・上海進歩書局石印本・文淵閣四庫全書本は「床」を「牀」に作る。
- (12) 石床上 黄晟本・上海進歩書局石印本・文淵閣四庫全書本は「床」を「牀」に作る。
- (以上の孫潛校本異文は、張国風『《太平広記》版本考述』附録「孫校本異文選粹」には挙げられていない。)

## 【書き下し】

開元中、峽口に虎多し。往來の舟船皆な傷害を被る。自後但是船有りて將に峽を下らんとするの時、卽ち一人を預めして虎に飼らわすに充つれば、方めて船を擧げて患い無し。然らずんば、則ち船中に害を被る者衆し。此れ自り例と成る。船二人を留めて岸に上がらしめ虎に飼らわす。經ること數日、其の後一船有り、内皆な豪強たり。數内二人單

窮たる有りて、衆に推し出だせられ、岸に上がりて飼虎せしめらる。其の人自ら力拒む能わざるを度りて、乃ち船を出でんとし、而して諸人に謂ひて曰く、「某貧窮にして、合に諸公の爲に代はりて死すべし。然るに人は各の分定有り。苟し便ちに其の害する所と爲らざれば、某別に懇誠有り。諸公能く允許するや否や」と。衆人其の語言の甚だ切なるを聞き、之の爲に愴然たり。而して問ひて曰く、「爾何事か有る」と。其の人曰く、「某今便ち岸に上がり、其の虎蹤を尋ねん。當に自ら別に計較有るべし。但だ某の爲に船を灘下に留むるを懇むるのみ。日午の時に至りて、若し來たらざれば、即ち船に任せて去るなり」と。衆人曰く、「我等如今便ち船を灘下に泊むるに、止だ今日の午時に住まるのみならず、兼ねて爾の爲に留宿し、明日を俟ちて若し來たらざれば、船即ち去るなり」と。言訖はりて、船乃ち灘に下る。其の人乃ち一つの長柯斧を執り、便ち岸に上がる。山に入りて虎を尋ぬるに、並びに人蹤有るを見ず、但だ虎跡を見るのみ。林木深邃、其の人乃ち一路を見る。虎蹤甚だ稠し。乃ち更に之を尋ぬるに、一山隘に至る。泥るむこと極めて甚しく、虎蹤轉た多し。更に行くこと半里、即ち一大石室を見る。又た一石床有り。一道士の石床の上に在りて熟寐するを見る。架上に一張の虎皮有り。其の人意へらく是れ虎に變ずるの所なりと。乃ち躡足し、架上に皮を取る。斧を執り、皮を衣て立つ。

## 【現代語訳】

開元年間のこと、峽口には多くの虎がいて、行き来する船はどれも被害を受けていた。その後峽を下ろうとする船はみな、人一人を用意して虎に食わせれば、ようやく船中みな被害はないのであった。そうしなければ、船で害にあう者が多かったのである。それからこのことが恒例となった。船は二人を留め置いて岸に上がらせ虎に食わせた。数日たつて、その後一隻の船が来た。中に乗っていたのはみな権勢があつて横暴な者であつたが、その中に二人身寄りもなく貧しい者がいて、人々に選り出され、上陸させられ虎に食わせられることになった。その人は自分には拒むことができな

いと考え、そこで船を出ようとしたところで、人々にこう言った。「私は貧しく困窮しているため、あなた方の代わりに死ななければなりません。しかし、人にはみな定めというものがありません。もしすぐさま虎に殺されなかったなら、別にお願ひがあるのですが、あなた方はそれを許してくださいますか。」人々は彼の言葉に差し追つたものがあるのを聞き、心を痛めた。そこで「あなたにはどのような頼みがあるのか」と尋ねた。その人が言うには、「私はこれから岸に上がり、虎の足跡をたどりませう。私には別に策も浮かんでくるでしょう。(あなた方には)ただ私のために船を浅瀬のあたりに留めておくようお願いするだけです。正午の時になつても、もしも私がおどつて来なければ、すぐに船に任せて行つてください」と。人々が言うには、「我々は今船を浅瀬のあたりにとどめよう。ただ今日の正午まで留めておくだけではなく、さらにあなたのために一夜を過ごさう。明日になつてもしあなたが来なければ、そこで船を出すことにしよう」と。話は終わり、船は浅瀬へと下つて行つた。その人はそこで一本の長い柄の斧を手に岸に上がった。山に入り虎を探したが、人の痕跡は全く見られず、ただ虎の足跡を見るばかりであつた。樹木の鬱蒼と茂る中に、その人はようやく道をひとつ見つけた。虎の足跡がびっしりといついている。さらにこれをたどつていくと、山間の道に出た。ぬかるみがひどく、虎の足跡はますます多くなつた。さらに半里進むと、大きな洞窟を見つけた。石の寝台が一つある。一人の道士が石の寝台の上でぐつすりとして寝ていた。衣桁に虎の皮が一枚かかっている。その人はここが虎に変わるところだと思つた。そこで忍び足をして、衣桁から皮を取り斧を手に持ち、虎の皮を着て立つた。

## 注

(一) 底本では二人となつてゐるが、前の文やその後の話でも虎に食わせるために用意されてゐるのは一人であり、一人とするほうが適切である。

(二) いつを起点として数日経つたのか判然とせず、この部分の物語的な意味も明確ではない。何か欠落があるとも考えられるが

詳しいことは不明である。『虎薈』及び孫潜校本では「数年」に作る。

(三) 注一に同じ。

(四) 「躡足」は古典語で足を「踏む」の意。『漢辞海』によれば、「足音をしのばせる」の意になるのは元明以降であるという。小説には口語的な語彙が使われる一つの例か。

## 『太平広記』卷四二六「峡口道士」後半「道士忽驚覺、自當歸天去矣。」

担当：鈴木政光

### 【原文】

道士忽驚覺。已失架上虎皮。乃曰、「吾合食汝。汝何竊吾<sup>(一)</sup>皮。」其人曰、「我合食爾。爾何反有是言。」二人爭競、移時不已。道士詞屈、乃曰、「吾有罪于上帝、被謫在<sup>(二)</sup>此爲虎、合<sup>(三)</sup>食一千人。吾<sup>(一)</sup>今已食九百九十九人、唯欠汝一人。其數當足、吾<sup>(一)</sup>今不幸、爲汝竊皮。若不歸、吾必須別更爲虎、又食一千人矣。今有一計。吾<sup>(一)</sup>與汝俱獲兩全。可乎。」其人曰、「可也。」道士曰、「汝今但執皮還船中。剪髮及鬚鬢少許、剪指甲。兼頭面脚手及身上、各灑少血二三<sup>(四)</sup>升、以故衣三兩事裹之。待吾到<sup>(五)</sup>岸上<sup>(六)</sup>、汝可抛皮與吾<sup>(一)</sup>。吾<sup>(一)</sup>取披<sup>(七)</sup>已、化爲虎、即將此物拋與。吾<sup>(一)</sup>取而食之、即與汝無異也<sup>(八)</sup>。」其人遂披皮<sup>(九)</sup>。執斧而歸。船中諸人驚訝。而<sup>(十)</sup>備述其由。遂於船中、依虎所教待之。遲明、道士已在岸上。遂抛皮與之。道士取皮衣振迅。俄變成虎、哮吼跳躑<sup>(七)</sup>。

又抛衣與虎、乃嚙食(12)而去。自後更不聞有虎傷人。衆言食人數足、自當歸天去矣。<sup>〔八〕</sup>  
 出解頤錄。<sup>〔九〕</sup>

【校勘】

- (1) 許自昌本では「吾」を「我」に作る。以下、(1)を付した道士の一人称「吾」は許自昌本では「我」である。
- (2) 許自昌本では「在」を「于」に作る。
- (3) 許自昌本・黄晟本・上海進歩書局石印本・文淵閣四庫全書本では「合」を「令」に作る。
- (4) 許自本では「二三」を「三四」に作る。
- (5) 孫潜校本では「到」を「過」に作るという。
- (6) 許自昌本では「岸」を「山」に作る。
- (7) 孫潜校本では「披」を「皮」に作るという。
- (8) 陳鱣校宋本では、「即與汝無異也」を「即與食汝無異也」と作る。
- (9) 許自昌本では「皮」を「衣」に作る。
- (10) 孫潜校本では「而」を「乃」に作るという。
- (11) 上海進歩書局石印本では「躑」を「蹲」に作る。
- (12) 許自昌本では「食」を「衣」に作る。

(以上の孫潜校本異文は、張国風『《太平広記》版本考述』附録「孫校本異文選粹」には挙げられていない。)

【書き下し】

道士忽ち驚覺す。已に架上の虎皮を失ふ。乃ち曰く、「吾合に汝を食らふべきに、汝何ぞ吾が皮を竊むるや」と。

其の人曰く、「我合に爾を食らふべきに、爾何ぞ反つて是の言有るや」と。二人争競し、時を移して已まず。道士詞屈して、乃ち曰く、「吾上帝に罪有り。謫せられて此に在りて虎と爲り、合に一千人を食らふべし。吾今已に九百九十九人を食らひ、唯だ汝一人を欠く。其の數當に足るべきに、吾今不幸にして、汝に皮を竊まる。若し歸さずんば、吾必ず須べからく別に更に更に虎と爲り、又一千人を食らふべし。今一計有り。吾と汝と俱に兩つながら全きを獲ん。可なるや」と。其の人曰く、「可なり」と。道士曰く、「汝今但だ皮を執りて船中に還れ。髪及び鬚鬢少許を剪り、指の爪甲を剪れ。兼ねて頭面脚手及び身上、各少血二三升を瀝したたらせ、故衣三兩事を以つて之を裹つつめ。吾の岸上に到るを待ち、汝皮を抛ち吾に與ふべし。吾取りて披きは已り、化して虎と爲れば、即ち此物を將もちて抛ち與へよ。吾取りて之を食らばば、即ち汝と異なる無きなり。」と。其の人遂に皮を披て斧を執りて歸る。船中の諸人驚訝す。而して備ぶさに其の由を述ぶ。遂に船中に於ひて、虎の教ふる所に依りて之を待つ。遲明、道士已に岸上に在り。遂に皮を抛ち之に與ふるに、道士皮を取りて衣を振迅す。俄かに變じて虎と成り、哮吼跳躑す。又た衣を抛ち虎に與ふるに、乃ち嚙食して去る。自後更に虎の人を傷つくること有るを聞かず。衆は言ふ、人を食らひて數足り、自ら當に天に歸りて去るべしと。解頤録に出づ。

## 【現代語訳】

道士がハツと目を覚ました。棚の上の皮はすでになくなっている。道士は言った、「わしがお前を食らうことになっているのに、なぜお前はわしの皮を盗むのか」。その人は言った、「わしこそお前を食べることになっているのに、どうしてお前は逆にそんなことを言うんだ」。こうして二人は言い争い、しばらく経つてもおさまらない。道士は言葉につまり、そこで言った。「わしは天帝に罪を犯したために、この地に流されて虎と化し、一千人を食らわねばならぬのじゃ。今までに九百九十九人を食らい、ただお前一人だけを欠いている。一千の数は今にも足りようとしているのに、

わしは今不幸にもお前に皮を盗まれてしまった。もし返してくれなければ、わしはまたもう一度虎と化し、再び千人を食らわねばならなくなる。今、わしには一計がある。わしとお前と二人ともこの身をまっとうできるのじゃが、どうじゃ」。その人は言った、「いいだろう」。道士は言った、「お前は、今はただ皮を持って船に帰れ。そして髪とあごひげ、鬢の毛を少し切り、指の爪を切れ。頭、顔、脚、手、さらに胴体からそれぞれ血を二三升ほど垂らし、古着数枚でこれを包むのじゃ。わしが岸の上に着くのを待ち、お前はわしに皮を投げてよこしなさい。わしが受け取って身にまとい、化して虎となったら、古着の包みをすぐさまわしに投げ与えよ。取ってこれを食らえば、お前と異なることはない」。そうして、その人は皮を身につけ斧を手に、船に帰った。船中の人々は（その人の姿を見て）驚きかつ怪訝に思った。そこでここに到る事情を詳しく説明した。そして船中で虎の教えてくれたとおりにして道士を待った。夜明け頃、道士はすでに岸に来ていた。そこで虎皮を投げ与えると、道士は皮を受け取ってかぶり全身をふるわせた。すると道士はたちまち虎と化し、咆哮し飛び上がった。次に古着を虎に投げ与えると、虎は嘔み千切って食らい去っていった。その後、虎が人を害するという話は全く聞かなくなった。人々は言った、「人を食べて数が一千に達したのだから、自然と天に帰っていったのだろう」と。出典は『解頤録』である。

## 注

- (一) こっそりと奪い取る。  
 (二) 「鬢」は顎の下のひげ、あごひげ。「鬢」は頬のひげから髪に連なる部分の毛。  
 (三) 「兼」は同時に併せ持つこと、同時にいくつかの事柄に及ぶことを表し、ここでは後者の意。  
 (四) 一升は、魏晉以前では約二百ミリリットル、隋唐五代では約六百ミリリットル。「頭面脚手及身上」のそれぞれから二、三升の血を流すとは考えにくい、ここでは少量を表す概数か。

〔五〕「三兩」は少量を表す約数。「事」は量詞で「件」と同じ。

〔六〕陳鱣校本に従えば「即ち汝を食らふと異なるなきなり」と訓じる。文章の構造としては「食之」と「食汝」が「興」を介して対になっており、こちらの方が優れているようである。なお、校勘は張國風『太平廣記版本校述』（中華書局、二〇〇四年）に依っており、本文は未見（北京市国家図書館蔵）。

〔七〕「跳躑」で上下に跳躍するの意。

〔八〕「當」はここでは推定（きつとくだろう）の意。

〔九〕唐代の文言小説集。『新唐書・芸文志』小説家類に『会昌解頤』四卷とある。散逸。『太平広記』には、「解頤録」のほか、「会昌解頤」「会昌解頤録」からの引用が、あわせて十二条ある。武宗の会昌年間（八四一〜八四六）の撰と考えられるが、撰者は不明。